

復活！体験学習のチカラ

コロナ禍で「夢や目標を持つ子」が減少 学校行事など体験で「生きる力」は取り戻せる

- 学校・家庭生活
- 新型コロナウイルス

2022.10.13



葉山 梢



コロナ禍では、学校の行事や家庭での体験活動が減りました。そのことで子どもにどんな影響が出ているのでしょうか。子どもの学力や教育政策に詳しい浜野隆・お茶の水女子大教授に聞きました。



話を聞いた人

浜野隆さん

お茶の水女子大教授

(はまの・たかし)専門は学力と教育政策。文部科学省委託の「全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」の研究代表として家庭の社会経済的背景と学力、非認知能力の関係を分析。共著に「学力格差への処方箋(しょほうせん)」(勁草書房)、「世界の子育て格差」(金子書房)などがある。

「非認知能力」を高める学校行事

——学校の行事や体験活動には、どのような効果があるのでしょうか。

学校内外の行事や体験活動には、子どもの「非認知能力」を育む効果があります。非認知能力の定義は様々ですが、読み書き・計算能力とは違う「生

きる力」と考えてもらえばいいでしょう。目標を達成するために自分の感情をコントロールする力や、自分を客観視する力も含まれます。非認知能力が高いと認知能力すなわち「学力」も高くなり、社会人になってから仕事の成果を上げやすいというエビデンスがあります。

学校行事というと、多くの方は本番だけを思い浮かべますが、実際は準備の時間を含んでいます。子どもたちは準備を進めながら友達と対話したり、時にはぶつかり合ったりもします。主体的に関わり、何かをつくり、誰かのためになるという機会も多い。それらの経験を通じて自己効力感や自己肯定感、社会に積極的に参加したいという気持ちを持つようになります。行事がなくなると、そのような機会が損なわれてしまいます。

——コロナ前に比べると、行事や体験活動の機会は大幅に減りました。そのことで子どもたちへの悪影響は出ているのでしょうか。

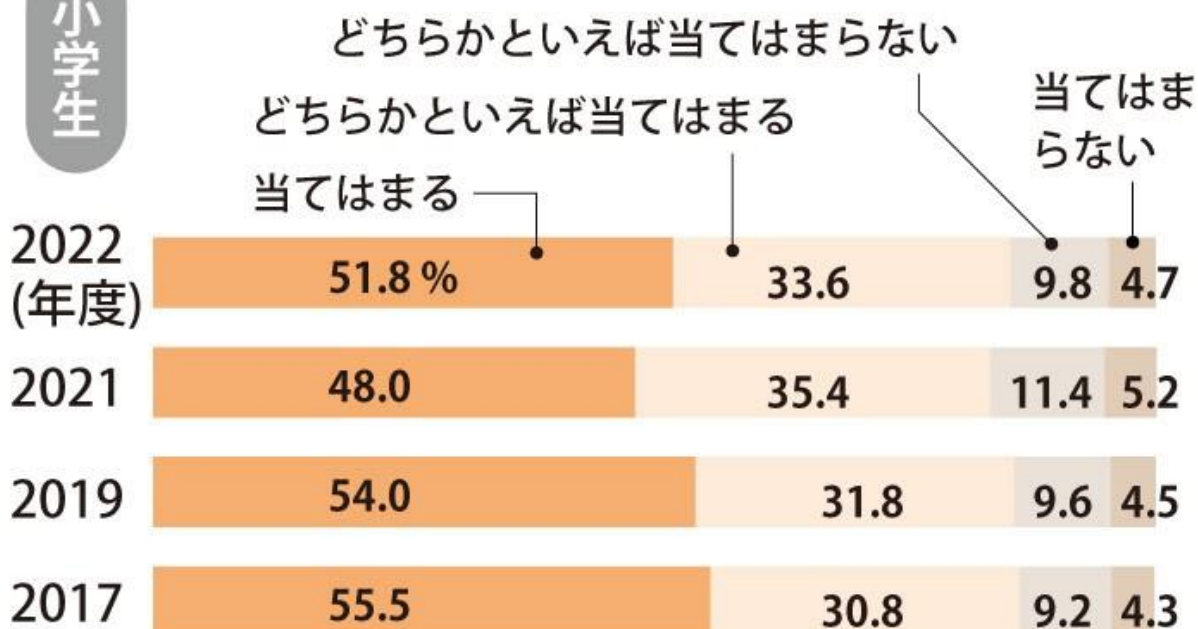
2021年度の文部科学省の全国学力・学習状況調査では、「学校に行くのは楽しいと思いますか」という設問に「当てはまる」と答えた小学生の割合が減りました(下のグラフ)。22年度にやや増加しているのは、21年度にコロナの影響で減った行事や友達との触れ合いが、22年度になって少しずつ回復してきたことによるものだと見ています。「どちらかといえば当てはまる」まで合わせると、22年度は楽しいと感じる子の割合がほぼコロナ前の水準

に戻っています。感染防止と両立しながら、学校現場や関係者が努力した結果の現れでしょう。

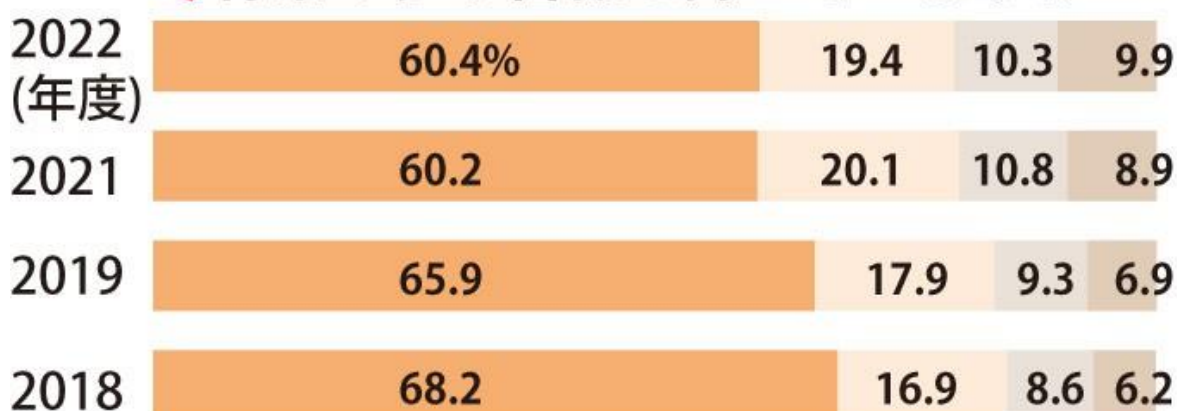
行事や体験活動が減ったことの影響

小学生

Q 学校に行くのは楽しいと思いますか



Q 将来の夢や目標を持っていますか



(文部科学省の全国学力・学習状況調査から。「学校に行くのは楽しい」という設問は2018年調査ではなし。四捨五入の関係で合計は100にならないことがある)

一方で、「将来の夢や目標を持っている」という子の割合は減ったままで、22年度も戻っていません。学校の内外で人と触れ合ったり、活動に主体的に取り組んだりして自己効力感を得る経験が減ったことが影響しているのではないのでしょうか。日本はもともと将来への希望を持っている子どもが少ないのですが、さらに深刻化した印象で心配です。これは学校だけでなく、社会全体で考えていかねばならない問題でしょう。

救いもあります。「人が困っているときは助ける」という回答が増えているのです。社会全体が困難を抱える中で、子どもたちも助け合いの大切さを感じ取っているのでしょう。

――コロナ禍の一斉休校では、学習の遅れへの懸念が強まりました。

教育委員会や学校現場は教科指導の時数を充足し、未履修の内容が出ないよう神経をとがらせてきました。保護者からも「学習の遅れの取り戻し」を期待する強い声が寄せられ、先生たちは教科指導に力を注いできました。学力調査の結果を見る限り、学習面についてはかなりカバーできている印象を受けます。

半面、学校行事は大きな影響を受けました。先生方は学校行事の重要性は認識しながらも、教科指導のほうに目を向けざるを得ませんでした。今後は「教科学習＝勉強」「行事や体験活動＝勉強からの解放」という二分法

から脱却し、どちらも子どもの成長に欠かせない学びの場だという意識をより強く持って対処していくことが重要です。

「体験格差」の解消を目指して

——今年行事を実施する学校が増えているようですね。

学校行事とひとくちに言ってもさまざまで、主に次の5種類があります。

- ①儀式的行事(入学式・始業式・終業式・卒業式など)
- ②文化的行事(学習発表会・音楽会など)
- ③健康安全・体育的行事(身体測定・運動会・避難訓練など)
- ④遠足・集団宿泊的行事(校外学習・遠足・修学旅行など)
- ⑤勤労生産・奉仕的行事(学校行事の準備・大掃除など)

意外と見落とされがちなのが、⑤の勤労生産・奉仕的行事です。地域の清掃活動などの「サービス・ラーニング」は、非認知能力への効果が高いといわれています。子どもたちの「好き・嫌い」だけでなく、教育効果という観点からメリハリをつけつつ、5種類をまんべんなく実施することが重要です。単年度で考えるのではなく、複数年度で考えて教育活動を組むといいでしょう。

この2年間、行事が実施できなかったことで、先輩から「レガシー」を引き継ぐことができず、学校文化が損なわれたという話も聞きます。コロナに敏感になりすぎるあまり、多くのものが損なわれてきました。今後は感染対策をと

りながら、通常の教育活動を進められるよう工夫して行ってほしいと思います。

——コロナ禍が長引くなかで、家庭の経済力で子どもの体験に差がついてしまうと心配する声もあります。

確かに、経済的にゆとりがある層は、学校外の教育サービス(習い事など)を通じて「体験を購入」する傾向があります。塾も学力(認知能力)を獲得するだけでなく、親・教師以外の大人、違うクラスや別の学校の友達などと触れ合う「多様な人間関係を持つ」体験の機会になっている部分があります。

経済力による学校外での体験の格差はコロナ禍の以前からありましたが、子どもが学校外で過ごす時間が長くなったことで、それがより鮮明になった面はあるでしょう。

といっても心配しすぎる必要はありません。家庭の社会経済状況(SES)と非認知能力の関係を調べたところ、SES と非認知能力にはそれほど強い相関関係はなかったからです。

それよりも、子どもの非認知能力は、家庭での基本的な生活習慣の確立や親からの働きかけで高まります。「朝ご飯を食べさせる」「決まった時間に起きる・寝る」「スマホ・ゲーム・テレビなどの時間についてルールを決めて守ら

せる」「子どもの良いところを見つけて褒めてあげる」など、ごく当たり前の養育行動を大切にしてください。

——ほかにも、家庭でできることはありますか。

大人も学ぶ楽しさをもつとともに、子どもといろいろなことを話し、子どもの興味や関心を引き出す工夫をするといいでしょう。

お金がかからず、誰にでもできる体験の場を活用する方法もあります。図書館、博物館、科学館、美術館、児童館などでの教育プログラムへの参加、地域の行事や団体の活動への参加、ボランティア活動、親子でのスポーツなどです。兵庫県豊岡市の「みらい応援制度（ひとり親家庭文化芸術鑑賞支援事業）」や日本財団の「子ども第三の居場所」など、「体験格差」の解消のため動いている行政や団体もあります。

それぞれの家庭や地域の実情、子どもの興味関心に合わせて、参加を検討されるとよいと思います。友達と遊ぶ、家で料理の手伝いをするといった日常的な体験や、不便な環境で失敗したり挫折したりする経験も必要です。